

# 五感の言語化

## —幸田文「おとうと」を対象に—

水藤 新子

### 1. はじめに

幸田文(1904～1990年)の作品は、その表現の自由さにおいて他の作家作品とは一線を画している。芸者置屋に身を置いた素人の視点で語られた「流れる」や、葬式を通して女性の半生を描いた「黒い裾」など、思いがけない設定——作品世界そのものもこの書き手の個性ではあるが、その後の展開を支えているのは自由闊達な表現にほかならない。

すぐそこが部屋らしい。云いあいでもないらしいが、ざわざわきんきん、調子を張ったいろんな声筒抜けてくる。——「流れる」

女所帯、しかも芸者ばかりのかしましさは、「ざわざわきんきん」という独創的なオノマトペ語で鮮やかに示される。来客に気づいて一瞬静まり返った中から、「あどけなく舌ったるく云いかけ」たものの、女中志願者とわかるや「同じその声が糖衣を脱いだ地声になっていた。」「舌ったるい」は、既成の語「舌足らず」と「甘ったるい」双方から合成された造語であろう。「声」が「衣を脱ぐ」とするのは擬人法であり、女が本来の地声を取り繕った耳あたりのよさを、錠剤の苦味をカバーする「糖衣」に見立てたものが続く。オノマトペ、造語、比喩表現を重ねて、聴覚への刺激は思いがけない拡がり

を見せる。そして幸田文「らしさ」とは、こうした五感の言語化——感覚表現の豊かさにこそあると考える。

### 2. 感覚表現の定義

一般に「感覚表現」という用語は、感覚の言語化と、感覚的把握との両義で用いられている。前者はいわゆる五感——実際の身体感覚を言語化した表現であり(例「舌を刺すような辛さ」)、後者は心理状態や認識の対象を感覚的に捉えた表現(例「辛口の批評」)である。

また「硬い声」のように、ある感覚を表すのに別のある感覚を表す語を借用してくる表現——共感覚表現も考えられる。「冷たい声」の場合は皮膚感覚、即ち触覚の「冷たい」が聴覚の領域に転移して用いられたと考えるが、こうした感覚間転移の方向性には法則がある。即ち、「触覚→聴覚」の方向性は決まっており、逆の転移はほぼあり得ないとされる。

こうした比喩表現だけでなく、オノマトペを用いた表現も多々見受けられる。口あたりひとつとっても、「まったり」と「さっくり」とでは主体の経験した「感じ」は明らかに異なっている。

調査にあたっては上記のすべての観点から用例を収集し、分析を加える。採集・分類の基準はいわゆる五感を元とし、下位分類は中村明編(1995)に倣った。

### 3. 調査作品

「おとうと」は1956(昭和31)年1月から1957(昭和32)年9月まで18回にわたって『婦人公論』(毎月一日発行)に連載された。連載にあたっては、「本編は昭和二十六年一月号から十一月号までにわたって本誌に連載された「草の花」の続編にあたるものである。編集部」との記事が付され、連載中は「一続「草の花」」と副題された。いわゆる自伝物の系列である。

テキストは岩波書店刊『幸田文全集』第七巻を用いた。なお引用文の表記については原則として現代仮名遣いとし、常用漢字については新字体に改めた。

### 4. 調査結果

「おとうと」に出現する感覚表現は、のべ464例／異なり327例に上った。以下、視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚・感覚的把握の順に概観する。

#### 4.1 視覚 [204例=のべ数、以下同じ]

##### 4.1.1 光影 [13: 光1 / 灯1 / 輝1 / 照1 / 眼2 / 眩2 / 艶2 / 暗1 / 影2]

1 碧郎は泣きはらした赤い臉の奥から、鬨いを挑んでひけはとらないぞというような、きらきらした眼をしていた。 [19頁-1行: 眼]

さまざまな感情を宿して、あたりの光を反射する眼のさまを「きらきら」と表す上記の例をはじめ、この項の用例はいずれも慣用的なものである。

2 新調の濃緑の乗馬ずぼんは粋で、長靴はてらてらとしている。彼は

蒼ざめて汗を流していた。白いシャツは裂けて泥まみれだった。

[158-13: 艶]

3 青白い指のさきに伸びてくる爪は、老人の爪と同様に粘りがなく涎を失っていた。 [207-10: 艶]

4 (真夏の太陽の)このかつとした光線の下に、血のような赤い花をつけている植物のことを思いうかべて、彼はやっとベッドに堪えているらしいのだ。 [209-3: 照]

5 病院の建物の白さがぎらついてたまらなかった。 [209-5: 眩]

6 廊下の白さも、天井の白さも、人々の看護衣の白さも、みなげんをくらくらとくらませ、 [209-5: 眩]

7 額にも頬にも顎にもまるで紅みはなく、くぼんでいる部分にはみな隈が出ていた。 [227-4: 影]

#### 4.1.2 色彩 [56: 白21 / 黒2 / 赤13 / 茶1 / 青2 / 紫1 / 変2 / 間2 / 多11 / 雑1]

作品後半の主たる舞台が病院であることから、白の出現率が最も高い。

8 手押車がずっと帰って行き、あたりがちまちかたづくと、白い人たちもずっと退いて行ったが、ひきかえのようにまた白い人たちがぞろぞろとはいつて来た。 [192-8: 白]

9 ベッドのぐるりを白くとりまかれて、げんは弟のからだを見てやることもできず、うしろのほうに控えさせられた。 [192-10: 白]

10 あまりにも整った順序・手際と、このどこを歩いても白いだけの建物とは、こちらを圧迫した。

[193-7：白]

次いで赤が出現する。弟・碧郎自身は咯血しないが、結核という病気がいやが上にも血を連想させるためであろう。

11 このかつとした光線の下に、血のような赤い花をつけている植物(＝カンナ)のことを思いうかべて、彼はやっとベッドに堪えているらしいのだ。 [209-3：赤]

12 そして彼はぼろぼろと涙をこぼした、美しく赤く上気した頬に。

[211-2：赤]

顔色の変化は、瞬間的な血色の変動である。病気から来る血の連想ではないが、赤はこのような変奏の形で現れる。

13 碧郎は痛いところへ触られて、かつと薄い皮膚へ血(＝赤)を透す。

[36-10：変]

黒は僅かに二例だが、ひとつはこのような印象的な比喩とともに現れる。

14 逆光線のなかのずぼんの脚は、さっきの鞆のAという字に似ていて黒かった。 [43-1：黒]

碧郎の目に映る不良学生の足のシルエットが、鮮やかに切り取られている。

15 鉄色無地の着物を着て、父親は骨太のからだをひっそりと坐っている。 [243-12：青]

16 紫の着物の袖の長さが感傷的に見えた。 [237-8：紫]

いずれも色そのものを示しているが、同じ紫でも次のような例がある。

17 母の、紫のようにさえ見える染めた前髪(＝白髪交じりの黒)がかなしく眼の底に映る。 [76-7：間]

染めた白髪が光の加減で全く別の色に見えるさまであり、いわばグラデーショ

ンのな色合いを示すものである。また、

18 乱れ箱のなかに外出着が畳まな  
いまま襦袢のほでな彩を重ねて、つ  
くねてある。 [92-4：雑]

複数の色で柄を構成している襦袢を「彩」と単純に示して、読み手にはむしろ鮮やかな色を感じさせる表現となっている。

4.1.3 動き [56：人間37／物体16／液体1／気体2]

19 弟はそれを知っていて、やけにぐいぐいと長ずぼんの脚をのぼしている。 [5-7：人間]

「早足」「急ぎ足」といった直接的な表現ではなく、動作主体が「脚をのぼす」さまに速度を見ている。オノマトペ「ぐいぐい」がそれを補強する。

20 碧郎の額に汗がほろっところび  
落ちたり、 [198-13：液体]

21 象牙の球というものはわりあいに重くてね、だから激しく突撃もするし、貴婦人みたいにするすると歩いたりするんだよ。 [144-19：物体]

22 氷嚢の水が溶けかかると、一ツ一ツの碎片は身じろぎしはじめ、おたがいの氷結から、からつと音を立てて離れるのだ。 [204-15：物体]

いずれも比喩、中でも擬人法が用いられている。20では額に浮いた汗が滑り落ちるのではなく「ころび落ちる」と見る。21ではビリヤードの球がぶつかり合う一方で、優雅に滑りもするのを「貴婦人」と見立てる。それだけでも目を引くところへ、20には「ほろっ」、21には「するする」が共起して印象を深めている。

また、オノマトペが修飾語ではなくサ変動詞となった例も見受けられる。

22 川から吹きあげられると(傘の骨)の折れた処がばくばくするから、力学的にその隣も折れちまうんだ。

[9-11：物体]

4.1.4 状態 [79：人体(頭部) 26 / 人体(胴体) 10 / 人体(手足) 7 / 衣装 7 / 植物 1 / 自然 15 / 物体 13]

23 先生は肉厚の頬に刻みをつけて微笑し、「ここが悪いのね、なにか感じある？」と女っぽく親しげに云った。

[192-13：人体(頭部)]

24 見る見る眼に角が立って、怒気のようなものがあがってきた。

[205-7：人体(頭部)]

ともに人の表情の変化である。23は「頬に皺を寄せて」、24は「目つきが陰しくなると」でも書かれるところを、「刻みをつける」「角が立つ」と形状の変化として捉えている。

25 父の爪さきがしっかりと八文字に踏みはだかっていた。

[224-4：人体(手足)]

爪先を外に向けて立つ父の足は、視点人物＝げんからは「八文字」に見える。そして「父は爪先を」ではない。碧郎の入院に付き添うげんが、車上から父の立ち姿を見ることになり、下げた目線はその足許をはっきりと認めたのである。

26 弟は崩していた膝を坐り直して、膝の上へ両手を突っかった。肩が聳えた。

[54-10：人体(手足)]

「膝を崩す」自体は慣用的な動作表現だが、引用部は続く姿勢の変化まで含め、やはり視点人物＝げんの目に映った形態の変化である点に着目したい。

変化ではないが、ものの形を個性的に

捉えた次のような例もある。

27 土手は入り陽で、笹縁とった大きな赤い雲が出ていた。

[128-9：自然]

「笹縁<sup>ささべり</sup>」は衣服や袋物のへり、端に平たい組紐や布をかぶせ縫いくるめたものだ。リウマチの母に代わって家事一切、勿論裁縫をも任される長女の立場からの、類例のない喩えと言えよう。

4.2 聴覚 [59]

4.2.1 音声 [20：唸4 / 叫1 / 泣2 / 笑2 / 唸1 / 低1 / 喩1 / 雑1 / 口調5 / 鳥2]

28 げんは(略)わあっと泣いてしまった。

[198-14：泣]

29 きっと生涯もう、(弟は)胸の底からわっはっはと笑うことはあるまい、とげんは思う。

[208-6：笑]

上記のような慣用的なもの、また。

30 妙な声<sup>こゑ</sup>がした。(鶯鳥が)クエー、クエーというのだ。クエケケケとも云う。

[128-5：鳥]

のようにオノマトペで鳥の鳴き声を写し取ったものもあるが、目を引くのはやはり次のような例である。

31 一ト晩じゅう、その部屋(の患者)は唸っていた。

[209-15：唸]

省略を伴うことで、一人一人が訴える痛みは、それを含む空間すべてに拡大され、膨張されて感じられる。さらに、

32 聴く耳には刺すような呻<sup>うめ</sup>きであった。

[210-10：喩]

やや陳腐な比喩ではあるが、用いることでその重篤さがより強調されている。この患者は、

33 結核性の腎臓摘出手術だった。ジ

ンテキ、ジンテキ、と風が吹いて通った。 [209-15：雑]

患者や付添人に伝わる情報の迅速さが窺われる。「ジンテキ」という術語の反復のみが取り交わされることばの密やかさを示している。また、「噂が流れた」ではなく「風が吹いて通った」との喩えは、病院内の情報は恰も自然現象のように、誰の意志が介在したわけでもなく行き渡ってしまうさまを物語っている。

34 碧郎の前へ行くと、げんの舌はぺらぺらととめどなく廻りだした。 碧郎がじいっとげんの目を見つめれば見つめるほど、ぺらぺらは速く廻転した。 [182-12：口調]

真実を悟られまいと気遣うあまり、却って話し過ぎてしまう。「ぺらぺら」というありふれたオノマトペは、止められない舌の動きでもあり、上滑りする口調でもあるのだろう。

4.2.2 音響 [39：楽器3／乗り物2／機械1／衣1／食1／住1／体6／騒4／雑13／静7]

朝から面白くないことがあって、朝食も食べず学校へ向かう碧郎を、げんは慌てて追いかける。

35 止めるひまがなくてももう裏門の鈴が鳴った。 [10-11：楽器] 弟が家を出るところを見たわけではない。ただ「裏門の鈴が鳴る」響きを聞いて判断したのだった。こうした表現で多用されるのもオノマトペである。

36 がらりと玄関の戸があいたまま、締らないのだった。 [221-12：住]

35、36とも、一文中に一種破格な接続が見受けられる。それぞれ、

35' 止めるひまがないまま裏門の鈴が鳴って、出て行ったことを示した。

36' がらりと玄関の戸があいたまま、締る音が聞えないのだった。

などとする方が一般的ではないか。特殊な効果を狙った意図的な語法違反は超格法と称されるが、この書き手の場合そうした故意の技法に走るとは考えにくい。むしろ文章意識が欠落している現れと見做すのが妥当であろう。

37 看護婦たちが、ごわごわと音のするほど糊の利いた白衣に着換えてお焼香に来、匂いの高い菊を手向ける。 [266-3：衣]

看護婦の白衣は糊が利いて音を立てそうなほどだった。比喩的な音と現実の見た目が一体化した、擬音語擬態語双方の機能を持ったオノマトペとなっている。

38 あの髪の毛(を切るとき)のじょりりじょりりという音、どうやって我慢するんだい？ [206-11：雑]

39 彼の胸がぜろぜろぜろぜろと鳴っているのが聞えた。

[222-1：体]

鋏で切られる髪、病気を抱えた胸、それぞれの立てる音が、単純な同形反復ではない個性的なオノマトペで示される。

40 「いやだい。やってみろ。」がと頬骨が鳴った。「ばかやろ、やってみろ！」 [47-14：体]

碧郎は不良学生に絡まれ、仲間になれと脅される。「殴る」とは書かれていないが拳が骨に当たる響きで殴られたとわかり、「痛み」への言及はなくとも、「がっ」という語からその程度は容易に想像がつく、間接表現となっている。

41 (掃除ばあさんは)たたきの上を

さあっ、さあつと掃き始めた。規則正しい清々しい箒の音がした。

[128-3: 雑]

「さあっ、さあつ」だけでも掃く音とわかるところへ、「規則正しい清々しい」と重ねる。反復で規則性は伝わるが、それを「清々しい」と書くまでには掃除という行為、それが特に神社の境内を清めるものであることが働いているだろう。

42 馬は口金のはまった口で人参の音をさせた。 [156-11: 食]

「人参の音」とはどのような音だろうか。硬い野菜が丈夫な歯で齧られる以上硬質な響きだろうが、あまりにも直截な表現が思いがけず新鮮に感じられる。

オノマトペは俗語的で、文章への多用は避けられる傾向にあるが、こうした直截なもの言いはそれとはまた別の、直感的な現実の捉え方を示したものだろう。

#### 4.3 嗅覚 [3: 人1 / 植物2]

嗅覚は三例と少なく、好ましいものは二例とも植物であった。

43 雨に洗われた桜若葉はほのかにかぐわしい。 [12-5: 植物]

44 看護婦たちが、(略)お焼香に来、匂いの高い菊を手向ける。

[266-3: 植物]

弟の呼気に血を感じないことでほっとする、下記の例もある。

45 それとなく息の臭いを嗅いだ。血の臭いはなくて、咯血したのではないようである。 [223-2: 人]

病院に詰めて看病を行ったげんには、その場のおいはいやというほど感じ取られたはずだが、だからこそ一切描かなかったのであろうか。

#### 4.4 味覚 [5: 料理4 / 食品以外1]

こちらも五例と少ない。

46 貧乏ゆえにおかずが悪いのだというより、明らかにそれは心の遣ってなさから生じる不親切なまずさだった。 [11-1: 料理]

47 まずいお菜の日は弟に対していい気持ちではなかった。

[11-9: 料理]

48 うどんや蕎麦は長さにうまさがある。 [249-9: 料理]

実際の料理については「うまい」「まずい」を言い、「甘い」「辛い」といった下位分類は一例しか出現しない。

49 冷たくあまいものがほしかった。アイスクリームをあつらえた。

[183-11: 料理]

やはり唯一現れる塩辛さは次のようなものであった。

50 鼻血が出てしおからかった。もう一発耳のあたりへやられて、彼はぐるっと我を失った。

[47-15: 食品以外]

用例が少ない上に「まずさ」に偏るが、家庭では主人公である姉がリウマチの母にかわって行き届かない炊事をしており、家族の間もぎくしゃくしていて食事を楽しむような環境ではない。病気に焦点が当たってからは、患者も家族も食を楽しむどころではない。このような偏向は当然の帰結と見做せよう。

尚、嗅覚・味覚いずれもオノマトペは一切共起しなかった。

#### 4.5 触覚 [53]

4.5.1 触感 [24: 硬6 / 軟4 / 粘1 / 粗1 / 膨1 / 触7 / 重4]

51 コンクリートの床はつくづく堅いと思う。 [215-9：硬]

碧郎に付き添うとは言っても、自分のベッドがあるわけではない。畳ではなく床に蒲団を敷いて寝る日々が続くのは、若く健康な身体にも堪えることだった。

52 水が板のような堅い感じを舟底にぶつけ、そのたびに舟はたしかに浮きあがっている。 [155-3：硬]

モーターボートで駆け抜ける水面が見せる、本来の性質とは似ても似つかぬ抵抗が「堅い」と表される。

53 げんは聴いているうちに膝がぎりぎり固くなった。 [24-4：硬]

碧郎が濡れ衣を着せられつつあると知ったげんは、いたたまれない思いで母の話の聞いている。正座した膝のあたり、自分の意志とは別の力が入っていく体感が、オノマトペとともに描かれている。

54 さっき中田のすわっていた後ろの笹のもさもさへ突っこんで膝を突いた。 [46-14：膨]

「もさもさ」は草や毛が乱雑に密集しているさまをいう。「もさもさした」と修飾語にするのでなく、「茂み」と類義の名詞としてしまうところが、乱暴で面白い。

55 あんまり（東京の街中は）空気がどろっとしているので、どうかすると、ふっと吸う息をとめてみるものがあるの。 [167-11：触]

関東大震災の後、向島から小石川へ転居しての実感である。気体を液体に、しかも比重が高く不潔な印象の「どろっ」を選んでなぞらえたところが生々しい。

56 「碧郎さん！ あんたまあ！」脇の下に手を入れて持ちあげると、ずさっとして重く、 [221-15：重]

一度は好転して自宅療養していたのに、僅かな不注意が再発に繋がってしまう。「どさっ」なら降りかかって来る重みだが、「ずさっ」は「ずしっ」を連想させて沈む感じがする。

ここでもオノマトペが効果的な例が続くが、次のようなものもある。

57 髪がこわれるように吹き靡いた。 [155-4：強]

飛ぶように進むモーターボートの上で受ける風は冷たく強く、「鼻でする息が塞がって、口をあけると喉の息が塞がったほどだった」。「髪をこわす」ではなく「髪がこわれる」として、主眼は風でなくこちらの髪にあることを伝える。「乱れる」に較べて大げさに思われる表現だが、当時の髪型にはふさわしい。

#### 4.5.2 痛痒 [8：痛8]

58 （からだが）冷えればしもやけはじりじりと凍ってきて、重く刺すように痛む。 [90-4：痛]

冷感、触感を伴う独特の痛覚には、遠い記憶を呼び覚まされる読者もいそうだ。

59 塩分が刺戟して痛がらせ、つぎには酸類がしみた。 [244-14：痛]

「刺戟」はある反応を引き出すものであって直接痛覚を示しはしないが、ここでは痛みを呼ぶものとなっている。

#### 4.3.3 湿度 [2：体2]

僅かに二例、いずれも体感である。

60 よかったという安心と一緒に、はじめて眼のなかがうるんだ。 [76-2：体]

61 皮膚が油気もなく乾いているの

に、背骨はじとじとと湿っている  
……おもしろくなさ。 [162-9:体]

4.3.4 温度 [19: 冷5 / 寒1 / 涼1 / 火照2 / 暖1 / 暑5 / 熱4]

同じく体感を表すものが多い。

62 来などは何ということばづかいだ。  
頬が破裂しそうにかっとほてった。  
[73-2:火照]

63 川風に追われてせつせと歩けば  
からだは熱くなる。 [90-3:熱]  
次の例は少し特異なものだ。

64 袷になったとき彼は突然姉に、島  
田髷に結って見せてくれと云いだし  
た。 [235-4:涼]

温度の表現は見当たらないが、「袷」は裏地のついた着物で、それを着るようになったということは秋の訪れを意味する。伝統的な服飾文化、衣替えという年中行事を示唆するだけで「過ごしやすい季節が来た」とわかる、間接的な涼感の表現と見做せよう。

4.6 感覚的把握 [140: 光2 / 色6 / 形55 / 音13 / 味2 / 痛痒13 / 温湿23 / 触26]

65 げんはにゅうと強くなった。(略)  
向うもにゅうと強さがはみ出した  
のがわかる。 [159-8:形]

「強さがはみ出した」は抽象を具象に喩えた、まさに感覚的把握である。「にゅう」は「だしぬけに」「突然に」などと置き換えられるだろうが、オノマトベにしたことで尚一層感覚性が増すのだ。

66 手続書に捺印して、入院の保証金  
を請求された。どかっとした額が立  
体感でそこに書かれていた。

[196-8:触]

重いものが下ろされる／降りかかる「どかっ」に「立体感」と添えたことで、まとまった金額を提示されたことが、若い娘にとってどれほどの衝撃であったかを雄弁に物語る。

67 おびたしい文字が結核に食い  
破られているのと同じことだった。  
[204-8:形]

げんが毎週持ち帰る請求書に対し、父は必ずきちんと現金を用意している。しかし父がどれほど多くの仕事をこなそうとも、治療費は必ず追いかけてくる。父の書く一文字一文字が、そのまま結核という病の餌食になっているかのような錯覚が、端的に示されている。

68 母にも母のさまざまな感情が入り乱れて中心が立たなくなっているのである。 [33-14:形]

「思い迷う」「悩む」に相当する状態を「中心が立たな」と言う。精神状態を建築物のように見立てた表現である。

69 父親はたまりかねてことばをひったくる。 [98-10:形]

母が話し終えるのを待たず、遮るようにして意見する父の様子を「ひったくる」と見る。ことばという抽象物が、実際に掴めるもののように扱われている。

70 おぼつかなさがたちこめていた。 [196-7:形]

71 その緊張は手術室と七号室との通路にことに濃かった。  
[209-12:形]

「たちこめ」るのは霧や煙などの気体、濃淡を感じさせるのは色彩や陰影だが、ここではいずれも感情の言い換えである。同様の例として次の一群がある。

- 72 そんなばかなことあるか、(略) 心から「思い」が噴きこぼれるほど反撥したのに、 [14-6: 温湿]
- 73 (母には) どこか気楽なところへ頼りたい、しっとりした頼りたさが見えていた。 [26-7: 温湿]
- 74 病院は不足で、しかも溢れるような病人だった。 [178-3: 温湿]
- 75 (父の) 「悲しさ」がほとぼしっていた。 [188-7: 温湿]
- 76 「痲痺と泣きたさ」が沸々とたぎった。 [194-9: 温湿]
- 77 「置」などびっしょり水を含んだかとおもわれる鎮まりかたをしている。「父も母も」水漬いているように黙っていた。 [201-1: 温湿]

群衆や感情が水に(後者の場合は湯にも)に喩えられるのは周知のことであり新奇さは薄い。しかし「噴きこぼれる」「ほとぼしる」「沸々とたぎる」のような強い語を選んだところに、また従来からの慣用的な言い回しを下敷きにしつつ、さらに的確な表現を考案しようとした書き手の意欲を強く感じるのである。

## 5. 「おとうと」における感覚表現の特徴

従来指摘されてきたように、この作品においても最も多く出現したのは視覚の言語化であった。

- 【光影】用例数は少なく、取り立てて個性的な用法もない。
- 【色彩】40%近くを占める白はほとんど病院内の描写である。次いで多い赤は花と血のイメージ。複数の色を一文中に集中して用いる手法も少なくない。また、具体的な色名を明示することなく

読者に想起させる例も見受けられる。  
【動き】色彩と同数現れた。人間のそれ(顔の表情から身体的動作に至るまで)が70%近い。

【状態】下位分類の中で最も多く現れた。半数以上が人体の描写である。  
以下の順位も先行研究の通りで、第二位は聴覚の表現である。

【音声】ガチョウの鳴き声の再現など、60%でオノマトペを利用している。

【音響】特定の下位分類への偏向は見られない。実際耳にしたものをオノマトペに置き換えた表現が50%強を占める一方、直接的過ぎて意外性のある描写も唐突に現れる。  
第三位は触覚であった。

【触感】何かに実際に触れての描写が半数近くを占める。オノマトペも多く併用される。

【痛痒】8例のみ。痛みだけで痒みの表現はなく、オノマトペも出現しない。

【湿度】僅かに2例のみで、いずれも生理的な身体感覚であった。

【温度】特定の下位分類への偏向はない。味覚・嗅覚の用例がごく少なかったのも、先行研究から外れるものではなかった。

現実の五感のみならず、感覚的把握の用例が多数出現した(実際の用例数は視覚に次いで二位)点も大きな特徴と言える。下位分類としては【形】が最多、【触】、【温湿】と続き、約75%を占める。家族の感情がもつれてぎくしゃくするさまを堅牢な建築の組みあがるさまに喩えたものや、水の持つ幾多のイメージの中でも負の側に焦点を当てた比喩とオノマトペを併用したもの、また慣用的に「対立的な感情」と書くだけでは飽き足らず、「擦れ

あい」と言い換えた例もある。

オノマトペの頻出はこの書き手の個性として既に指摘されており、本作品についてもそれは変わらない。述部にあたる語自体がオノマトペ+サ変動詞となっている例も9例見受けられた。

各感覚表現とオノマトペとの併用も多く、視覚が82例(【光影】6、【色彩】7、【動】42、【状態】27)、聴覚が33例(【音声】12、【音響】21)、触覚が21例(【触感】15、【痛痒】0、【湿度】1、【温度】5)で(嗅覚・味覚はともに出現なし)、特に視覚の【動】については実に75%がこれに当たる。

感覚的把握の63例は全体の45%程度だった。形容詞を用いるだけで意味は十分伝えられるが、感覚的な語句で強化することで、より実感の伴った表現をつくり出しているのである。

## 参考文献

- 浅野鶴子編(1978)『擬音語・擬態語辞典』角川書店  
阿刀田稔子・星野和子(1995)『擬音語・擬態語使い方辞典』創拓社  
尼ヶ崎彬(1988)『日本のレトリック』筑摩書房(1995年 ちくま学芸文庫)  
天沼寧編(1974)『擬音語・擬態語辞典』東京堂出版  
池上嘉彦(1975)『意味論』大修館書店  
磯貝英夫(1970)「近代文体と対峙する古典的語体文—幸田文—」(『文学論と文体論』)明治書院  
市川孝(1963)「幸田文の文体」(『講座現代語5』)明治書院  
小野正弘編(2007)『日本語オノマトペ辞典』小学館  
金井景子・小林裕子・佐藤健一・藤本寿

- 彦編(1998)『幸田文の世界』翰林書房  
小島孝三郎(1972)『現代文学とオノマトペ』桜楓社  
中村明(1977)『比喩表現の理論と分類』(国立国語研究所報57)秀英出版  
中村明(1977 / 1995)『比喩表現辞典』角川書店  
中村明(1979)『感情表現辞典』六興出版(後に中村明編(1993)『感情表現辞典』東京堂出版)  
中村明(1991)『日本語レトリックの体系—文体のなかにある表現技法のひろがり』岩波書店  
中村明編(1995)『感覚表現辞典』東京堂出版  
中村明(2007)『日本語の文体・レトリック辞典』東京堂出版  
中村明(2011)『文体論の展開—文藝への言語的アプローチ』明治書院  
野内良三編(1996)『レトリック辞典』国書刊行会  
飛田良文・浅田秀子(2002)『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版  
山口仲美監修(2003)『暮らしのことは擬音・擬態語辞典』講談社

## 付記

本稿は、2011年6月3日・4日に関西外国語大学で行われた第48回表現学会全国大会のシンポジウム「感性と言語—日本語を中心に—」における報告に加筆修正を加えたものである。御意見御質問をお寄せ下さった参加者の皆様に、この場を借りて篤く御礼申し上げます。

(中央学院大学)